

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のことばを掲載いたします。

さてこうして古今の指導者たちを調べてみて、私は自戒しながら街頭に立ったのであります。街頭に立つということは、ある意味では英雄的行為のようにみえて、みずから快と思うむきもあるでしょうが、しかしながらこれは容易にできることではありません。否、たやすく街頭にたつなどということは、警戒されるべきであります。内容もないのに軽々しく立つことは、みずから毒するものです。選挙演説ならばそれはそれなりの意味があつてよいでしょうけれども、こといやしくも精神的な面について、何百日というあいだ街頭に立つということは、かなりの決意とそして努力を要するものであります。自分がつまらない人間であると思えば思うほど、勇気がいるのです。

私は先人がどういうふう歩いてきたかを、一々しらべました。そうして動的生活に転ずる前には、かなりの静的準備期があつてそこに蓄積され、会得されたものが、やむにやまれないまごころとなつて、街頭にほとぼしるのでなければ、真のものとはいえないということを知つたのです。

それなら現在街頭に出ている私自身は、どうなのであるか。カント的スピノーザ的たらんか、ソクラテスの孔子的たらんか、



わが道の決定

丸山竹秋

という迷いはどうなつたのか。

ここに私はみずから進んでスピノーザの道、またはソクラテスのゆき方をえらんだのではないということをし、いわなければなりません。なににのやり方などというものは私のばあい、意識して選ぶことはできませんでした。とにかく自分の父が街頭に出た、その父を助けずにはおられないという子としての気もち、これが根本でありました。

自分には信念もなにもない。自分ひとり、また自分から進んで街頭に立つなどという大それた考えには、毛頭なれません。もちろん街頭にたつということ自体は、すこしもおそれるにたりませんが、英雄的な自負的なえらそうな気もちでは、できなかつたということなのです。ただ父を助けなくてはならない、父を手伝いする意味ならば、火の中、水の中でも飛びこもう、街頭に立つくらいはもの数ではない、そうしただけだつたのです。

そこにもとづいて、私の行動は決定されました。その気持ちるものを……ちようど、電信柱をささえる何本かの針金のように……カントとか、ソクラテスとかの生き方が、参考としてあつたのでした。

今後は必要に応じて、あるときは動的な、またあるときは静的な勉強修練の時間をもって、自分を生んでくれた父のしごとの手伝いを一生けんめいにやつてゆこう。

私は、こう決心したのであります。

『岐路に立つ』より